西之内町地車新調実行委員会通信

2022年
6月号

新調通信に関する御問い合わせ
西之内町公民館
072-444-7712

西之内町新調地車
彫刻の物語背景と紹介（14）
～半田寺山の落命～

紫陽花が色鮮やかに咲く季節となりました。西之内町の皆様におかれましては、お元気でご活躍のことと存じます。西之内町の運動会も無事終了し、盆踊りの音頭練習も始まっています。新型コロナウイルスの収束はまだとは思いますが、一つの山を超えたような気もします。しかし、油断は禁物です。引き続き対策の徹底を行い、祭礼行事も開催できるようにご協力の程、お願い申し上げます。

今月も新調地車の彫り物の場面について少しご紹介します。『難波戦記』では、豊臣家びいきの物語が髄所に見られ、史実とは異なると考えられる部分があちこちにあります。今回ご紹介する物語も、謎が多くあります。

１６１５年（慶長２０年）大坂夏の陣で真田幸村のいわゆる『平野の地雷火』の突撃を受け、関東勢は崩れたって敗走します。家康もわずかの旗本を連れて和泉路の方向へ落ちて行きましたが、林が点在するところを通りかかると、その中から六文銭の旗をかざした一隊が現れます。真っ先に槍を構えながら進んでくる騎乗の大将らしい武士が大音に呼ばわります。「真田左衛門佐幸村、先刻より大御所を待ち受けており申した。いざ、見参、見参!!」

「うわあっ」と悲鳴を上げて、家康も家来たちも逃げ出します。幸村は既に討ち死にしたとささやかれていましたが、家康は幸村の死に疑問を持ち続け、家来たちの中にも半信半疑でいた者もいました。そこへとうとう本物が現れたと家康も彼らも驚いたのでした。しかし、この幸村も実は影武者であり、攪乱作戦は成功を納めます。

家康には大久保彦左衛門、横田甚五郎をはじめ旗本三、四十人が付き添って逃れ、秀忠も近臣に守られて河内路へ落ちます。馬を失った家康は歩きながらときどき血を吐き、彦左衛門に介抱されておりました。

「わしはひどく疲れた。どこかこの辺に駕籠はないか」

家康は、既にほとんど歩けなくなっていました。「わたくしめが探して参りまする。大久保殿は大御所に付き添っていただきたい」甚五郎がそういって出かけ、あちこち探しましたが、人家もまばらで駕籠などありそうにもありません。林の中に寺があったので行ってみると、新しい棺桶がありました。駕籠がないので、これに入ってもらうよりほかはありませんでした。ほかを探している余裕はなく、それを担いで戻ると、家康は苦笑して言いました。「いいものを探してきたな、甚五郎。わしは昔から死んだ真似をして何回か助かったことがある。よし、よし、これに入るぞ。」

付き従っている旗本たちの方がびっくりしましたが、彼らは家康を棺桶に入れて担いで行きました。

幸村は二十五人を一組として家康、秀忠の行先を探しておりましたが見つからず、夜も更けたので無念の涙をのんで城内に引き揚げました。家康の棺を担いだ一行は、和泉の半田寺山に着くと、家康の命令で棺を下ろして休みました。

後藤又兵衛の一行は、ちょうどこの時ここを通りかかりました。

棺のようなものを中にして、たむろしている三、四十名が、「こんどもまた、真田奴にやられたな。あれはまだ生きていたのだな。手強いといっても、あのくらい手強い奴はいないな。」と言っているのが又兵衛の耳に入りました。会話から徳川勢ということがわかり、幸村が奇略で関東軍をまたひどい目にあわせたのが察せられたのでした。

又兵衛は緊急な用事のために城を抜け出て熊野へ行き、家人

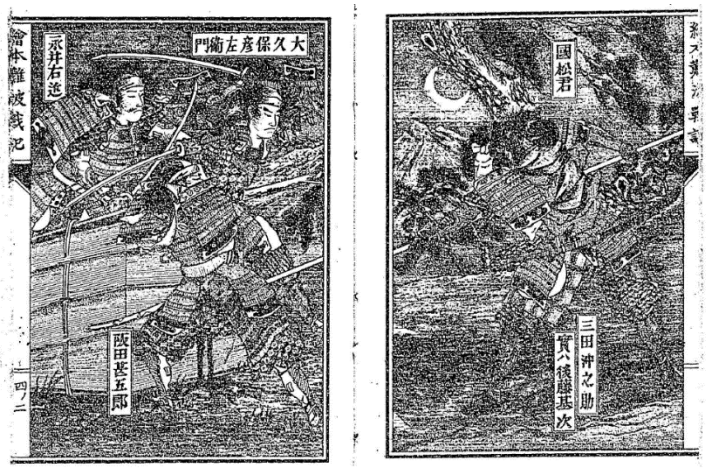
南宋寺　家康の墓石

の新宮左馬之助とともに、秀頼の側室とその子の国松を連れ城に戻る途中でした。こんな時はすっと通りすぎるのですが、又兵衛はふと戦いたくなりました。虫が知らせるのでありましょうが、棺の中は死人ではなく家康だというのは、むろん知りません。彼は左馬之助を側室に付き添わせてさきにやると、国松を自分の母衣の中へ入れて背負い、愛用の槍（日本號）をしごいて近づき、無言で襲いかかりました。そして十四、五人をそばの谷へ突き落としたのでした。「敵だ」「手強いぞ」関東勢は叫び合いました。又兵衛は無意識に棺桶に槍を突き刺しました。それを目に入れた彦左衛門は真っ青になりました。彦左衛門は大太刀で又兵衛に斬りかかります。又兵衛は槍の名人でありましたが、どうしたはずみか、彦左衛門の太刀は又兵衛の槍を半ばから斬り折ったのです。又兵衛は槍を捨て刀をぬきました。旗本たちが又兵衛を囲み、彦左衛門はその場から離れると棺桶の蓋を取りました。家康はここに絶命したのでした。

その後徳川家は「天台宗」の僧「南光坊天海」（なんこうぼうてんかい）を影武者にして戦を続行したと言い伝えられています。

日本號の槍。本邦無双といわれた三条小鍛冶宗近の鍛えた懐剣を槍の穂に直したる槍で、故太閤から福島正則がもらい、それから黒田の家臣母里太兵衛に渡り、太兵衛から又兵衛が酒を賭けて飲み取ったもので、三位の槍といわれています。

堺市に三好長慶によって建立された由緒正しき南宋寺があります。そこに家康の墓が建立されております。徳川秀忠、家光の両将軍が相次いで同寺を参拝している記録があることからも、ここが徳川家にとって特別な場所であることが推測されます。



『難波戦記』挿絵　半田寺山日本號による家康落命

新調地車の彫り物　進捗報告
～車板、木鼻の着手～

6月に入り、大脇の部材の仕上げ作業に着手しております。この部分は、見送りの重要な場面構成を担う部分で、平面と妻面で場面が異なり、人物も背中合わせで仕上げていくという非常に手間のかかる部分です。しかし、その手間のかかる分、満足度の高い作品が丁寧に仕上がっております。

彫り物の新たな進捗としては、車板にかかっております。現地車の車板は小屋虹梁一体型構造であり、新調委員会ではその構造を継承することで進めております。現地車の新調当時では珍しい構造とされ、現地車の特徴の一つとして語り継がれてきました。しかし、新調地車の車板は、また一風変わった雰囲気で進めております。車板にしては厚みを持たせ、下から見上げた時に豪華な印象を得るものとなっております。

また、木鼻の彫刻にも取り掛かっております。下絵が完成し、荒彫りにかかります。手に持つものは・・・と、お伝えしたいところですが、今月はこの辺で次月の報告をお楽しみにお待ちください。

大屋根正面車板を前板からカスミ迄を重ねた状況です。

新調委員の独り言

法被が変わるのかという問い合わせを、新調実行委員会の方で受けております。正直なところ、祭礼関係者の中でも、賛否が分かれ、費用の問題が大きなウエイトを占めております。

しかし、機会としては、地車新調に合わせて法被も変わることも、過去にありました。ここでは断言はできませんが、費用の負担を極限まで少なくして、変えることも一応検討しております。今後の新調通信でお知らせいたしますので、よろしくお願い申し上げます。